

乳児喘息における ロイコトリエン受容体拮抗薬の役割

How should be LTRA used in the management of infant asthma

西田 光宏*1・吉原 重美*2

Mitsuhiro Nishida

Shigemi Yoshihara

浜松医療センター参与兼小児科長*1

獨協医科大学医学部小児科准教授*2

Summary

ロイコトリエン受容体拮抗薬(LTRA)は、乳幼児のウイルス感染症に伴う反復喘鳴と呼吸困難の軽減目的で広く処方されている薬剤である。しかし、今までの報告では、遷延性の経過をとり、好酸球が気道炎症に関与すると推定される年長児などの一部を除いて、プラセボとの比較で、有意な臨床効果を認めていない。一方で、慢性喘息と診断された乳幼児を対象とした報告では、LTRAの安全性は高く、喘息症状の軽減に有効であることは、確認されている。しかし、慢性喘息児でもすべての症例に有効ではなく、個別治療と医療経済的な視点から、LTRAが有効な症例の選別が可能な指標の確立が望まれる。

Key words

ロイコトリエン受容体拮抗薬, 乳児喘息, モンテルカスト, 反復喘鳴, respiratory syncytial virus

はじめに

ウイルス感染症は、喘息発症に関わる重要な環境因子である。さらに、喘息発症後の気道過敏性亢進やリモデリングを進行させる悪化因子であり、喘息発作を誘発する誘発因子でもある。Yoshiharaらは33~35週で出生した早産児を対象に、生後6ヵ月まで抗respiratory syncytial(RS)ウイルスヒト化モノクローナル抗体であるパリビズマブを投与した群は、非投与群に比較して、生後3年間の反復喘鳴は有意に抑制されたと報告しており(図1)¹⁾、RSウイルス感染症がその後の反復喘鳴に大きく関与することを改めて明らかにした。したがって、乳幼児のウイルス感染症に伴う喘鳴の予防と症状軽減は、喘息発症頻度の低下と慢性喘息の軽症化に寄与する可能性がある。また、乳幼児の反復喘鳴には、慢性喘息に移行する頻度は高くないが、ウイルス感染症に伴って重症な喘鳴と呼吸困難を繰り返すタイプを含めた、いくつかのフェノタイプがある。これらの重症な喘鳴と呼吸困難を反復する児のquality of life(QOL)と医療経済的な視点から、喘鳴の頻度と重症度を軽